



—世界に飛び出した「秋田人」—

## 上海で魯迅に出会った鎌田政国

北条 常久

(あきた文学資料館 名誉館長)

秋田県の中学校3年の国語教科書(光村図書)に魯迅「故郷」(竹内好 訳)が採用されたのは昭和41年である。その後教科書は変更されていないから、県民の大多数が中国人作家魯迅の「故郷」を読んできたはずである。卒業時に中学生に国語教材で一番印象に残った作品は何かと質問すると、圧倒的に「故郷」という答えが返ってくる。

「故郷」は、次のような作品である。主人公の「私」は20年ぶりに故郷に帰ってくる。かつては地主であったが、今は没落してしまった生家の家財を引き払うためであった。主人公の心の中で美しかった故郷はすっかり色あせて、土地だけでなく住む人の心も貧しく荒み果てていた。主人公は、少年時代に仲よく遊んだ小作人の息子閩土(ルントウ)との再会を楽しみにしていたが、再会した彼の口から出た言葉は、地主と違い小作人である彼が生活苦を訴えるという悲しい身分差別であった。しかし、その後一家が故郷を離れる時、主人公の甥宏児(ホンル)が閩土の五男水生(シュイション)と再会を約束することを知って、私は明るい未来を感じて故郷を離れることができるという作品である。

魯迅の作品は日本人に愛され、魯迅もまた日本人が大好きであった。彼は、「近代中国文学

の父」に違いないが、彼の文学への道は日本で決意され、日本人との交流の中で文学者として大成した。

明治36年に専門学校令が發布され、それまでの旧制高等学校医学部が独立して、地方に医学専門学校が開校した。魯迅(本名：周樹人)が清国留学生として仙台医学専門学校(現・東北大学医学部)にその二回生として入学してきたのは、明治37年秋(当時は秋入学)のことで、日露戦争開戦の年である。定員110名、彼は初の留学生である。クラス担任は敷浪重治郎、副担任は藤野巖九郎。日本人学生からは、小国日本に敗れた愚弱な国の民と疎外されたが、副担任の解剖学教授・藤野巖九郎は日本語がままならない魯迅にノートまで添削して丁寧に指導した。

しかし、細菌学の授業で講義の合間にスライドで日本の日露戦争の戦勝が上映された。そこにはロシア軍のスパイだった中国人の処刑される場面もあった。日本人学生はそれを見て万歳を叫んだが、魯迅は、その母国の悲劇に強いショックを受けた。魯迅は「医学で国民は救えない。それより国民の精神改革が必要だ」と文学への転向を決意する。彼はこの時を「幻灯事件」と名づけて次のごとく書く「およそ愚弱な国民は、身体がどんなに健康で、どんなにたく

ましくとも、せいぜい無意味な見せしめの材料と見物人になるだけのことだ。国民の精神のありかたそのものを変えなくてはならない。」「(呐喊<sup>とっかん</sup>自序)

魯迅が藤野先生に別れの挨拶に行くと、先生は残念がって自分の写真の裏に「惜別」と書いて手渡した。魯迅が仙台医専に学んだのは僅か一年半であったが、藤野先生の恩情は忘れられず、魯迅はその写真を書斎に飾り、小説「藤野先生」を執筆した。

東北大学には、現在魯迅が学んだ階段教室が残され、記念室には藤野先生の朱筆入りのノートが保管されている。それだけに、東北大学関係者には魯迅についての研究者は多く、今年(2019年)に入っても筆者の友人で中国文学研究家・三宝政美(元秋田大学、富山大学教授)から、「藤野先生の『ノート添削』をめぐって(上)、(下)」(岩波書店「図書」4・5月)が送られて来た。

その魯迅の最初期の翻訳者鎌田政国(1896～1988年)は、秋田藩側医の家柄で秋田市手形新町に生れ、旧制秋田中学校を卒業後、中国大陸で活躍する人材を育てるという上海の東亜同文書院に県の派遣生として進学した。専門学校東亜同文書院は、上海にありながらも日本人の経営による日本人のための学校で、日本の各県は県費で優秀な学生を送り込み、中国語と中国の歴史、地理、文化を学ばせた。それは、日本の中国進出の一環でもあったに違いない。鎌田は東亜同文書院で、中国語を学び、魯迅の作品を読み、学校の修学旅行である恒例の支那調査大旅行で中国各地を旅し、魯迅の描く中国の実際を知った。鎌田は東亜同文書院で中国を学ぶに従い、日本ではまだ文学者として認められなかった時期の魯迅に出会い翻訳に着手した。

昨年刊行された「越境する中国文学—新たな冒険を求めて」(東方書店)で藤澤太郎・桜美林大准教授が、鎌田を「(魯迅の)日本最初期の翻訳者」と位置づけた。

鎌田が魯迅の翻訳「風波」を発表した「農民」(昭和3年9月、第1巻第2号)が出版された当時は、魯迅の日本での知名度は文壇的には皆無であった。確かに鎌田の翻訳は稚拙な点もあるが、魯迅の原文に近く、魯迅の原点に迫る翻訳でもある。藤澤太郎によれば、鎌田の翻訳は、魯迅の屈折した文体と類似していて、彼の初期の作品の雰囲気を実に伝えているという。

魯迅は帰国後、国民の精神の改革を訴え、中華民国政府の軍閥を強く批判したので、国民党官憲から手配の手が伸び、中国人が関与できない日本人租界に逃げ込んだ。魯迅は日本が懐かしく、日本人の内山完造が経営する内山書店に顔を出した。店主内山は毎日のように現れる魯迅に専用椅子を用意した。魯迅の首には懸賞金がかかり、魯迅一家は内山書店で潜伏生活をした。さらに上海事変が勃発、戒厳令が布かれると、内山書店から200メートル先のアパートに引っ越した。彼はここで人生最後の文筆活動をし、生涯を閉じた。魯迅は日本人の藤野厳九郎と内山完造がいなくては生涯を全うできなかったはずである。私は魯迅のこのアパートを尋ねたことがあり、その思い出をむのたけじに話すと、彼もその部屋を尋ねて寝室のベッドに身を横たえてきたと語っていた。私のような魯迅のファンは多い。

鎌田政国は、魯迅を論じる時に忘れられない人である。鎌田は井上隆明・ノースアジア大学名誉学長の伯父にあたる。